

洛友会会報

京都大学工学部電気系教室内

洛 友 会

〒606-8501

京都市左京区吉田本町

075-753-5270

www.rakuyukai.org

希望の持てる年でありますよう

洛友会会長

長尾

真 (昭34年卒)



洛友会の皆様、新年おめでとう
ございます。

今年こそ、これまでの混迷から
抜け出し、希望の持てる年になっ
て欲しいと、誰もが望んだ
元旦であったと存じます。どうか
健康に留意し、充実した一年をお
過ごしください。

* * *

昨秋、20年の長きにわたって
洛友会を支えてくださった木
村磐根名誉教授が叙勲の栄に浴さ
れましたことは、我々一同にとっ
て大変喜ばしいことでありまし

のでしよう。3年余り前の総選挙
の時の多くの国民の期待がほとん
ど裏切られたのですから、今度は
そうでなく日本の明日に期待が持
てるよう進展させて欲しいもので
す。

国内の政治はもとより国際政治
においても混乱ばかりで、経済に
おいても世界的に先の見えない状
況が続いております。特に電気・
電子関係の日本の産業界が非常な
困難な状況に陥っているのは、い
ろんな原因があるとはいえ、まこ
とに残念なことでもあります。こう
いったときは慌てて小手先のこと
で切り抜けようとしてもうまくゆ
かないでしょう。メディア等で書
きたてられても動ぜず、忍の一字
で耐えてゆくことが必要でありま
す。そうすれば、いつの日にか「日
はまた昇る」ということになるで
しょう。日本人の忍耐力と勤勉の
性格が失われないうちに、我々には
希望があるのであります。

* * *

暗い話ばかりしていてもしょう
がありません。明るい話題に転じ
ましょう。京都大学にとっては、
なんとといっても山中伸弥先生の
ノーベル賞受賞があります。新聞
等で詳しく報じられましたが、地
味なしらみつぶしの実験という努
力の末に、誰も考えなかったiP
S細胞を作ること成功されたわ

けです。何事もあきらめずに追及
することの大切さを示してくだ
さったことは、我々にとって大変
教訓的であります。

松本紘総長によりますと、これ
までの日本のノーベル賞受賞者19
名のうち自然科学系は16名で、そ
のうちの半数8名が京都大学関係
者であるとのこと、我々はこれ
を誇りとすることが出来ます。電
気・電子関係学科の先生方も多く
の優れた研究成果を上げ、社会に
貢献しておられますことは、大変
喜ばしいことであります。

山中先生の示されたことは、思
想的、哲学的にも大きな意味を
持つております。細胞分裂は時間
とともに一方に進んで行くと信
じられていたのに対して、ある種
の操作を施すことによってスター
ト地点に戻しうることを示
されたことになりました。西洋の歴
史観、哲学思想は一方向的で進歩
発展であるのに対して、インドに
おける思想、仏教における思想に
は輪廻という概念があります。山
中先生の実現されたことがそう
いった東洋思想と関係している
と言いますが、この世の中には
いろんな思いもよらない考え方が
ありうるということを示してお
り、困難な時代においてこそ、と
んでもない考え方も大切であるこ

迎春

二〇一三年一月一日

本部役員

会長 長尾 真
副会長 松田 晃一

支部長

田村 和豊
松山 隆司

本部幹事

関西 丹羽 彰
東京 小澤 秀司
中部 根石 信行
中国 松井 三生
四国 今岡 幹典
九州 深堀 慶憲
北陸 松木 純也
東北 井上 茂夫
北海道 中山 道夫

荒木 光彦
木村 磐根
高橋 達郎
高岡 義寛
北野 正雄
小野寺 秀俊

とを暗示しているといえるでしょう。

* * *

昨年秋に国会において11月1日を「古典の日」とすることが決議されました。休日とはなりませんが、日本の古典をしっかりと読むようにしようということであります。昨年は方丈記が書かれてちょうど800年となり、また古事記が編纂されて1300年になる記念すべき年であったということも、古典の日を定める時の動機になりました。

方丈記には元暦2年の京都の大地震による災害のことが詳しく書かれております。例えば山は崩れ、河川を堰き止め、海からは津波が押し寄せた。大地が割け、水が噴水のように噴き出したとあります。これは今日いうところの液状化現象であります。といったことで2011年3月11日の東日本大震災との対比で方丈記はとても有名になりました。文章は平明で短いものですからぜひお読みになってください。枕草子、徒然草と並んで日本の三大随筆の一つとされています。この方丈記は皆様もご存じのように下鴨神社の神職だった鴨長明が出世をあきらめて山科の山野の里に四畳半ほどの庵を構え、そこで書いたのですが、その生き方は我々にもある種の暗示を

与えてくれるかもしれません。

いずれにしても京都というところは、いたるところに歴史が刻みこまれていますし、一本の紅葉の木を見ても、そこに何とも言えない風情を感じさせてくれます。昨秋の紅葉は気候の変化が急だったせいか、京大の近くの真如堂や東福寺、嵐山は言うに及ばず、いたるところ、実にきれいでした。ただ京都に住んでいる私などは、美しいところはどこも観光客がいっぱいで、風情をゆつくりと味わう雰囲気は壊されてしまうと嘆きます。しかし年間5000万人以上の観光客を呼び込んでいる観光産業のことを考えると、人出に文句を言うべき筋合いではありません。皆さんもたとえば京大のホームカミングデー（昨年は11月10日でした）に参加され、その前後に学生時代を思い起こして京都のあちこちを散策されるようお勧めいたします。そうすれば心身がリフレッシュされ、新しいアイディアも出て、自分の人生に新たな活力を注入することができるでしょう。

* * *

昨年秋に家内とバリ島に行ってきました。以前から知り合いの筑波大学名誉教授大橋力先生という方がバリ島のウブドの王様の顧問をしておられ、王様からもらっ

た広い土地に大きな別荘を建て、年間に2、3か月滞在しているような活動をしておられるのです。以前から来るようにお誘いをいただいておりますが、昨年3月末に国立国会図書館長を退任しましたので、ようやく行くことができたというわけです。

大橋先生は広くいろんな研究をしておられますが、最も有名なのが、人間は20kHz（キロヘルツ）までしか聞けないといわれているのを、実は100kHz以上まで感じていることを実証されたことです。熱帯雨林の中はこの程度までの周波数の音が充滿していることも捉えられ、この音を身体に浴びていると精神状態が安定し、また元気が出てくることも明らかにされました。このような成果は「音と文明」（大橋力著、岩波書店）に詳しく書かれております。最近はこの成果が世界の脳科学者から注目されるようになってきました。この100kHzの音環境は京都大学総合博物館の熱帯雨林のコーナーで体験することが出来ます。

ウブドというところは村の住民がすべてにおいて共同体的に活動しており、いわば日本における江戸時代か明治初期の村落共同体のような感があります。しかし芸術的に非常に高いものを持つてお

り、ガムラン音楽、伝統舞踊、それからケチャという神をたたえる踊りなど、非常に芸術性の高いことをすべて村人が生業とは別に主として夕刻からやっております。これらの演技の芸術性を高めることに大橋先生がかなり貢献されたようで、村人の実演を二晩にわたって見せてもらいました。このような村落共同体は現代社会ではまったく失われており、私などには懐かしく感じられますが、若い人々には想像するのも難しいでしょう。人々にとつての文化とは何かといった観点からは、現代社会が失った貴重なものが大切にされているのを目の当たりにして、まるで別世界に行つたように感じる数日でした。

* * *

私は21世紀は科学技術の時代から心の時代に移つてゆくだろうと随分前から言つてきておりますが、そういうことの大切さに多くの人が気が付き始めているように見えます。そういったときに、このウブドやブータンのような社会の在り方は注目を集めるのではないかと思います。これからの半世紀を生きてゆく若い皆様方は、これからの世界、社会のいろんな可能性について関心を持って歩んでゆくことが大切と存じます。今年も皆様にとって良い年であ

迎春
二〇一三年一月一日

京都大学

電気関係教室

教員一同

鐵 S C C

代表取締役社長 松尾 泰

宇宙技術開発鐵社

代表取締役社長 松尾 泰

電子開発学園
北海道情報大学

理事長 松尾 泰

迎春
二〇一三年一月一日

りますよう祈念いたします。

教室だより

エレクトロニクス・サマー キャンプ報告 2012

模型工作や電子工作などの技術的な経験をほとんどしないまま入学する学生が増えている。彼らは、電気電子工学の専門科目の面白さや、電気電子工学と社会との接点（身の回りのさまざまなものに利用されている）に思いが及ばず、電気電子工学に対する興味や学習意欲になかなか火が付かない。学科としてこの問題は極めて重大と考え、様々な取り組みを行っている。その一つが、夏休みを利用して電気電子工学の面白さや魅力を体験するイベント、「エレクトロニクス・サマーキャンプ」である。

5年目となる今年は9月24～26日の日程で吉田キャンパスにて実施した。このイベントは、単位は付与せず、学生本人の自由意志で参加する形式を取っている。参加資格は電気電子工学科の1～3年生である。

内容は、与えられた課題に3日間をかけてじっくりと取り組み、創意工夫や試行錯誤を積み重ね、目標を達成するものとなっている。

る。最終日の午後にはコンテスト（学生、教員、洛友会会員に公開）という形で学生達に成果を披露してもらい、優秀者には学科長名で賞を授与している。（後援の洛友会からは副賞として図書カードを贈呈。）

サマーキャンプの企画・運営は、数名の若手教員と十数名のTA（学部4年生と大学院生）で行っている。以前にサマーキャンプに参加した学生が、4年生や大学院生となり、TAとして運営を手伝うようになるなど、学生（TA）主体のイベントとして確立しつつある。

キャンプと称しているが、実際に宿泊するわけではない。ただ、時間を気にせず、仲間とコミュニケーションを密にしてキャンプの気分で充実した時間を過ごそうという意味でこの名称を使っている。（最終日前夜は、多数の学生が徹夜で製作・調整に取り組んでおり、彼らとそれに付き合ったTAにとっては名実共にキャンプとなっている。）各学年の課題は以下の通り。

1年生「LEGO Mindstormsによるロボット製作」

本年度も昨年に引き続き対戦形のオリジナル競技「マクスウェルの悪魔」を課題に設定した。今年

度は、昨年度のサマーキャンプを素材に編集したビデオの宣伝の効果もあり31名もの参加応募があった。競技の概要は、減点対象の赤玉（-1点）と得点対象の青玉（+1点）を各ロボットが自陣を巡回しながら判定し、得点を高めるように行動することで最終的な自陣のボールの得点を競う。ロボットはLEGO Mindstormsを用いて作成する。参加者は、11チームに分かれて、2日間でロボットの製作及びプログラムを行った。3日目のコンテストでは、リーグ戦と決勝トーナメントを行い、順位を決定した。実力が拮抗していることもあり、終盤での大逆転や延長サドネスによる決着も多く、大会は大いに盛り上がった。3位までのチームを表彰するとともに、独創的なロボットを作ったチームには



「うけたDE賞」が授与された。

2年生「Programmable System-on-Chipを使って音のものを作る」

2年生は、C言語によるプログラミングや、電子回路の基礎を授業・演習で学習済なので、より専門的な題材としてワンチップマイコンコンピュータによる装置の設計・製作を課題としている。ここ数年間は、アナログ、デジタル機能ブロックを内蔵するワンチップマイコン（Cypress PSoC）を用いて、音を出力する装置（音さえ出せば何でも良い）を作るというテーマに15名の学生が取り組んだ。（2年生の課題は個人で取り組む。）最初の1日は、実習を含むPSoCの集中セミナーが開催され、2日目からは、学生個人毎に各自のアイデアを実現すべく製作に取り組んだ。技術、アイデアに優れた多数の作品がコンテストで披露された。最優秀賞には、サウンド付きでNゲージの鉄道模型をパワーMOSFETで制御する「愛すべき鉄道魂」が、優秀賞には、PSoCのアナログ機能を活用したエレキギター用のエフェクター「ゆるふわ」が選ばれた。他に、技術賞、アイデア賞、特別賞が授与された。2年生のテーマは毎年トランジスタ技術編集部が協賛も

迎春
二〇一三年一月一日

公益財団法人

京都技術科学センター

（旧財団法人近畿地方発明センター）

理事長 壽榮松 憲昭

公益財団法人

応用科学研究所

鐵田中プリント



迎春
二〇一三年一月一日

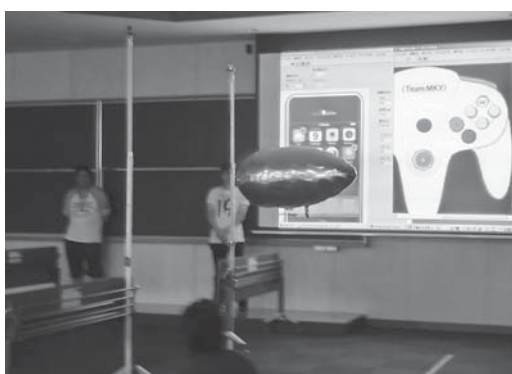
頂いている。



3 回生「ヘリウムガスで浮かぶ飛行船の無線制御コンテスト」

ヘリウムガス飛行船の姿勢・軌道をパソコンから無線自動制御するというコンテストである。今年は8チーム、23名の学生が、徐々に狭くなる3つのゲートをうまく通り抜けてゴールを目指すという課題に取り組んだ。初日はなかなか思うように制御できず苦戦していた各チームだったが、夜を徹した頑張りもあって、最終日のコンテストでは熱戦が繰り広げられた。結果、合計得点の高かった2

チームを優勝・準優勝として表彰した。また、審査員による評価が高かった1チームには技術賞が、そして特別賞として、協賛の日本ナショナルインスツルメンツ(株)より「Graphical System Design Award」が1チームに授与された。



サマーキャンプ最終日のコンテストは非常に楽しく、大いに盛り上がりがあります。洛友会のみならずのお越しをお待ちしております。また、同窓会としてサマーキャンプ(初日や二日目)を見学して頂くことも可能ですので、見学希望があればご相談下さい。(一昨年度にS41年卒同窓会の見学がありました。)

平成24年度電気系教室懇話会懇話会報告

平成24年度電気系教室懇話会が、教員、学生、ならびに卒業生他約120名の参加者を得て、10月12日(金)に総合研究8号館3階大ホールで開催された。電気工学専攻長の松尾哲司教授が司会を務められ、ご講演に先立って、電気電子工学科長の小野寺秀俊教授が挨拶をされた。その後、講師に招かれた、塩津正博名誉教授(昭和41年電気工学科卒)、生存圏研究所の矢吹正助教(推薦会員)、独立行政法人宇宙航空研究開発機構の小澤秀司氏(昭和46年電気工学第二学科卒)のお三方より大変興味深いご講演を頂いた。講演の概要は以下の通りである。

「超伝導のための極低温環境(液体ヘリウム・液体水素の不思議な世界)」

(塩津正博名誉教授)



液体ヘリウムには、粘性流体である常流動液体ヘリウムと、粘性の無い超流動液体ヘリウムの2種類があることを冒頭で簡単に紹介して頂いた後で、ご講演の主題である超流動液体ヘリウムの特性や応用について紹介頂いた。

まず、「超流動」とは、液体の粘性抵抗が消失した状態のこと、容器の壁をのぼって外にこぼれ出したり、原子一個がやっと通れる程度のすき間に浸透したり、古典的な熱流体力学では取り扱えない現象であることを説明頂いた。この「超流動現象」を説明するために、London, Tisza, Landauらによって二流体モデルが提案され、それまで不可解であった多くの現象に納得のいく定性的説明が与えられたという歴史的経緯を解説して頂いた。しかし、同時に、この二流体モデルで提起された、ノーマル成分とスーパー成分という2種類の「対向流」が実在することは多くの研究者に信じられていなかった(「cannot believe it」と言う学者もいた)という事実も

実験を交えて分かりやすく説明して頂いた。そこで、先生の研究室では、この「対向流」の存在を実証するために、大規模な実験装置(クライオスタット)を作成し、実験結果と数値解析結果に基づいて2種類の流体の対向流が実際に

存在することを突き止めた経緯を説明して頂いた。

次に、超流動ヘリウム冷却による超伝導コイル冷却の安定性についてご紹介頂いた。まず、粘性が無くコイルの隙間に自由に入入りして加熱部の熱を排除するという非常に優れた冷却特性を持った超流動液体ヘリウムは、核融合炉に使われる大容量超伝導マグネットを安定利用するために強く期待されていたことをお話頂いた。続いて、当時の核融合科学研究所に導入された大型ヘリカル装置(LHD)において、超流動ヘリウムを使って超伝導マグネットを冷却する取り組みについて説明頂いた。具体的には、LHD導体の設計時には観測されなかった、片側伝播現象という現象を実験的に発見し、その現象解明とモデル化を行った経緯を詳しく解説して頂いた。

最後に、現在も現役研究者として、(独)宇宙航空研究開発機構(JAXA)と共に実施されている液体水素に関する研究をご紹介頂いた。これまでの液体水素に関する研究の多くが、ロケットエンジンの冷却などの高温域を対象としており、超伝導物質の冷却を目的とした低温域の研究はほとんど行われていないとした上で、冷媒としての液体水素利用の有効性と課題

に関して詳しく解説して頂いた。ご講演後の質疑応答では、超流動液体ヘリウムの対向流が実在することを疑った理由について質問があり、「はじめからそう思うに思っってしまった」という先生の研究センスの良さを垣間見る回答で質疑応答を締め括られた。

「北極と南極の気象から見た地球環境変動」

(矢吹正教助教)



北極と南極の気候の特徴に関する分りやすい説明から始まり、近年重要な問題となっている地球環境変動に関して詳しく解説して頂いた。北極域の大気汚染が進んでいることが示された上で、その大気汚染が光の吸収を促進すると共に雪氷を黒化させることにより雪氷の融解を促進している事実をご説明頂いた。JAXAの最新の

報告では、北極の海水が現時点で過去最小になっており、その原因の一つが北極域の大気汚染であることをご紹介頂いた。例えば、京都市の大気よりも北極域の大気が汚れているという事実が定量的に示され、この大気汚染が、シベリア、中国、ヨーロッパから来る人為的汚染大気が北極域に閉じ込められることにより発生していることを解説して頂いた。また、近年その拡大が問題となっているオゾンホールが、フロンガスだけではなく極成層雲が大きく影響を与えていることをお話頂いた。

次に、大気中に浮遊する微小な塵から構成されるエアロゾルに関してお話頂いた。エアロゾルが雲の生成や降雨の発生に大きく影響を与えており、大気エアロゾルの観測および解析は非常に重要であることを解説して頂いた。例えば、エアロゾルの粒子サイズに依存して降雨の発生しやすさが変化することや雲の寿命が変化すること、またそれによって太陽光を反射する時間が増えることを分りやすく解説して頂いた。

エアロゾルの解説に続いて、エアロゾルを観測するためのリモートセンシング手法であるライダー(Light Detection And Ranging: LIDAR)に関してお話頂いた。レーザー光を大気中に送出し、大気物質

からのレーザー散乱光を高い時間分解能で受光することにより、距離に応じた大気物質の分布を計測する。物質ごとに特有な散乱を計測することで、様々な大気物質を計測することが可能となることを解説して頂いた。また、極域において大気エアロゾル・雲、微量成分気体の放射効果や化学的性状を正しく見積もることを目的とした国際共同研究に関してご紹介頂いた。

最後に、極域の環境観測を支える人々と設備に関してユーモアを交えてご紹介頂いた。具体的には、雪に埋没しないようにジャッキアップで建物を浮かし続けることができる建築手法や遠隔医療の仕組み、発電機によって雪を融かし水を生産する設備やバクテリアによる汚水・排水処理の仕組みに

関してお話頂いた。ご講演後の質疑応答では、複数の質問とコメントがあったが、最後に、南極と北極での環境観測生活の違いについて質問があり、「北極は4日あれば帰ることが出来るが、南極は1年半帰れない」との回答で会場の笑いを誘って質疑応答を締め括られた。



「日本の宇宙開発と技術」

(小澤秀司氏)



日本の宇宙開発と技術と題してペンシルロケットからH・II Aロケット、そして、「はやぶさ」に至る日本の宇宙開発の歩みと共に、宇宙開発に必要なロケット、衛星、地上システムなどの開発・運用に必要な技術をご紹介頂いた。

まず、自己紹介を兼ねて、日本の宇宙開発の組織の説明があった。宇宙開発事業団(NASDA)は、アメリカ航空宇宙局(NASA)がアポロ計画で人を月に送った1969年に設立され、小澤氏はこの直後にNASDAに入社し技術部門を歩んで来られた。その後、2003年に宇宙関連の三つの組織が統合されて宇宙航空研究開発機構(JAXA)が設立され、小澤氏は現在、JAXA理事として経営企画や国際協力を担当されている。工学部の人間は皆JAXA

Aを知っているが、日本の一般市民の認知度は、その時々により大きく変わるという話があった。はやぶさが苦勞の末、地球に帰ってきたときは、NASDAを超えてJAXAの方が有名になり、80%の市民がJAXAを知っていると答えたそうである。

日本の宇宙開発の歩みについては、重要な出来事について、写真やイラストを用いながら分り易く説明して頂いた。途中、ロケット打ち上げのビデオ上映もあり、日本の宇宙開発の歩みを聞いた上で見るビデオは、より深く心に響くものであった。

ロケット打ち上げについては、各国との比較が議論された。ロケットを打ち上げる能力のある国は世界でたった10ヶ国しかなく、日本のロケットの打ち上げ成功率は全体で93%、H2以降は96%に達するとのことである。ロシアや中国、アメリカと肩を並べる高い成功率であることや、外国の人工衛星の打ち上げを受託するなど、日本の価格対打ち上げ能力も高いことが紹介された。また、人工衛星については、環境モニタリングや災害時に大きな力を発揮する、日本独自の観測衛星の紹介があった。

最後に、最近ニュースになった超小型衛星の軌道への投入の話が

あり、京大の電気電子工学科では非超小型衛星のプロジェクトを立ち上げて挑んで欲しいという後輩の学生達へのエールがあった。人気があり、就職が非常に難しいと考えられているJAXAだが、機械系に比べると、電気・電子・情報通信の技術者への応募は倍率が低く、電気電子の学生には十分チャンスがあるという話もあり、学生達のチャレンジを期待するとして話を締めくくられた。宇宙開発という挑戦的で夢のある内容と、分かりやすく熱意のこもったお話そして、小澤様が本学電気電子工学科の先輩ということも相まって、参加した学生達は皆食い入るように講演に耳を傾けていた。

講演会終了後、吉田南キャンパス生協食堂で約150名が参加して懇親会が開催された。司会は電子工学専攻長の木本恒暢教授が務められた。松尾哲司電気工学専攻長の挨拶、荒木光彦名誉教授の乾杯の挨拶に始まり、懇親の時間約1時間30分を挟んで、最後に北野正雄工学部長・工学研究科長の挨拶に続いて、飯田義直氏（昭和24年卒）の締め言葉で解散した。



◎退職記念行事のご案内

鈴木実教授と吉田進教授におかれましては、来る平成25年3月31日付けで定年を迎えられることになりました。左記の通り、先生方の最終講義ならびに記念行事を開催することになりましたので、ご案内申し上げます。

鈴木実教授 最終講義のご案内

日 時…平成25年3月8日（金）午後4時00分～午後5時30分
場 所…桂キャンパスBクラスター事務管理棟1階 桂ホール
題 目…「導電性酸化物から高温超伝導まで」
連絡先…掛谷 一弘准教授
TEL…075・383・2265
email : taishoku@skuee.kyoto-u.ac.jp

研究室Hd : <http://skuee.kyoto-u.ac.jp>
※最終講義終了後に福利・保健衛生棟2階のカフェテリア「アルテ」にて懇親会を予定しています。

吉田進教授 最終講義のご案内

日 時…平成25年3月13日（水）午後3時00分～午後5時00分
場 所…吉田キャンパス 総合研究8号館（旧工学部8号館）3階NSホール

題 目…「ICT（情報通信技術）に魅せられて」

「若き研究者へのメッセージ」

連絡先…村田 英一准教授

TEL…075・753・5317

email : taishoku@hanase.kuee.kyoto-u.ac.jp

研究室Hd : <http://www.deo.ccei.kyoto-u.ac.jp>

※最終講義終了後に同館1階の講義室1にて懇親会を予定しています。

吉田進教授 退職記念シンポジウムおよびパーティのご案内

吉田 進教授 退職記念シンポジウムおよびパーティは平成25年5月18日（土）の午後にウエスティン都ホテル京都にて開催予定です。

お問い合わせは、最終講義と同じ連絡先までお願いいたします。

会員寄稿

電気屋と機械屋

光野 英織

（平19年卒・関西支部）

私の勤務先である鉄道会社（近畿日本鉄道）の車両部門内では、「電気屋」と「機械屋」という呼び名を用いることがあります。

鉄道会社では、事務系職種と比較して技術系職種は専門性の色合いが強く、同分野の学科卒業者が同じ部門で仕事をする割合が高い傾向にあります。例えばレールの補修などを担う部門は土木系学科出身者がその大半を占めています。

ただし、車両部門では電気系出身者と機械系出身者がほぼ同数ずつ混在しているという特有の事情があり、その影響でこうした名前が生まれたものと思われまます。

両者の担当範囲は、電気屋がモーターやインバータ装置、ATSなどの保安装置、電気配線や電気小物品などであるのに対し、機械屋は空気系統中心のブレーキ装置や車体、台車のほか、空調装置やパンタグラフなども担当します。電子技術の進展により、最近ではたとえ機械屋であっても電気的知識も求められるようになり、

その区分は少しずつ曖昧になりつつあります。

よく耳にするフレーズとしては、「機械屋は曖昧な理屈が多くていいかげんだ。」「電気屋は細部までこだわりが強く理屈っぽい。」といった具合でしょうか。

時には、諸先輩方の家族構成を分析して電気屋の子供に女の子が多いことに気づいた者が、「電気屋は高圧機器に近づく作業が多いことから何らかの影響を受けているのでは?」といった医学的根拠の全く無い噂を流すこともありま

す。先ほどの理屈っぽさに関する両者の違いを少しだけ真面目に解析してみますと、鉄道技術部門の主たる業務である各機器の保守作業の内容とも関係があるのかもしれない。機械屋が保守する機械部品では限度値内に収めるべく物理的な修繕作業が多い一方、電気屋が保守する電気部品では電気回路を眺みながらの動作確認作業が多いといった背景も要因の一つと推察できます。

特に現業部門にてプロフェッショナルとして長年保守作業にあたっては係員からすれば、人生で最も多くの時間と労力を割いて取り組んでいる作業内容から影響を受けて、少なからずその人の考え方や価値観に変化が与えられて

いるとしても不思議ではないのかもしれません。

さて、ここで私の現在の業務について紹介させていただきま

すと、実は電気屋として入社したはずが機械屋の一部である車体担当として業務に励んでいます。

具体的には、二十五三年三月デ

ビュー予定の新型観光特急「しまかぜ」の設計担当者として、企画全般、車体・デザイン、新規機器設計などに携わっています。

仕事柄、車両部門外の方々と顔を合わせる機会が多く、その中でまた新たな考え方を発見することもあります。例えば、デザイナーと打合せをして「デザイン屋」の感性に触れたり、「宣伝屋」と協力してCMなどの宣伝媒体を制作したりする際など、車両部門の電気屋とも機械屋とも異なる価値観や解決手法を目にしたりします。

車両技術者という枠にはまったままでは見えない部分に触れながら仕事ができるのは新鮮であり、貴重な経験をさせてもらっていると感じています。



方を身につけていくことで個人としての厚みも増していくものなのかもしれません。

職場環境から受ける個人への影響については企業側も認識しているようで、総合職として採用した者をジョブローテーションなど活用しながら育成することに力を入れてはいるのは、必ずしも職能面からの経験に限った目的ではないのかもしれません。

これからの長い社会人生活の中で、私がいくつの「〇〇屋」を経験することになるか分かりませんが、新たな環境に身を置くことで、そこでの様々な経験が私の糧になるかと思うと少しだけ楽しみに思えてきます。

「環境が人をつくる」とはよく

言ったもので、その人が周囲の環境から得た情報は多かれ少なかれ個人のアイデンティティを形成する要素の一部と成り得るのかと思います。

一方で、望ましい環境を作り出すのもまた人であり、自らの置くべき環境を選択することや経験した環境の差異に対して敏感であることも個人の重要な資質の一つなのかもしれません。

環境から受ける影響は、これまでに述べたような業務内容のみに限らず、性別や出身地、家族構成などの統柄によるところもあるかと思っています。

私も地元の中部地方から関西地方に移り住んだ際に、その人柄や文化の違いに強い印象を受けた記憶があります。それから京都・大阪と渡って気づけば十年が過ぎようとしています。今後は奈良に居を構える予定をしており、より一層関西人としての素養を無意識のうちに身につけていくのかもしれない。

最後になりますが、みなさんも是非、デビューした折には新型特急で伊勢志摩へと足を運んでいただきながら、自らを置くべき環境について思いを馳せてみてはいかがでしょうか。



四国八十八力所遍路を終えて

長井 啓介
(昭54卒・四国支部)



二年前、ひよんな事から夫婦で

始めた「四国遍路」。一年近くかけなんとか完了。記憶を振り返りながら、その魅力について紹介したいと思います。

○きっかけ

世界遺産にも名乗りを上げるなど、ちょっとしたブーム、また、遍路旅の人達を目にする機会も結構ある。但し、「遍路」と言っても「うどん遍路」の方が身近であり、私自身が経験するとは思っていません。ところが、ある日突然妻が、旅行社のパンフを見ながら「死ぬまでに一度は行ってみたい。でも、あなたは週末もいつも忙しい。無理よね」と言い出した(妻は病気でなくてもないが)。これに、カチンときた というのがきっかけ。

○そもそも「四国遍路」とは

一言で言えば、四国の八十八カ所の札所を巡ろうというもので、江戸時代には確立。行程は、徒歩だと1200km。一日30km歩いて40日。基本はこの「歩き遍路」だが、厳しくまた時間も費用もかかる。昔は途中で亡くなる方も多く、そうした方々を弔ったあとも残っている。これに対し、車を利用すると行程は1400kmに延びるが、はるかに楽になる。バスツアーも全行程を一気に回るもの、阿波、土佐、伊予、讃岐の四つに分けて巡礼するもの、日帰り数十回な

ど選り取りである。

○私の場合

さらに気儘なマイカー利用。歩いても汗の出ない時期ということ。春秋の週末限定。これに、天候が良ければ、という条件付。当日の行程も全くフリー。参拝の受付開始時刻朝7時に最初の札所に到着するように出発、後は、カーナビを頼りに観光も交え、参拝受付の締め切りの夕方5時まで行ける。ところまで行こうというもの。

相当杜撰だが、マイカー利用の他のお遍路さんも結構みな良く似た状況。札所の駐車場などには遍路宿の案内広告が建てられており、実際夕方、携帯で当日の宿探しをする夫婦の姿も何組も目撃した。

○お遍路に際しての身支度

「歩き遍路」については、菅笠や手甲・脚半までまとった本格仕様が多い。一方、マイカー派は、せいぜい普段着に白衣をはおり、輪袈裟を首にかけるといったレベルまで。これに白い頭陀袋(巡礼バッグ)を肩にかけてというのが定番。袋には、納経帳、納札、数珠、教本といった巡拝用品を入れる。私は仕事柄、モバイルPCを追加。これら用品は、全て一番札所の霊山寺の売店で揃えることができる。

○いざ出発 1日目、阿波の国

「発心の道場」(四月中旬)

まずは、霊山寺で遍路用品一式を調達。あわせて、配布してくれる「四国遍路」という冊子(作法、心得、お経など必要事項を網羅)を見ながら、参拝の作法を覚えてもらう。以上1時間弱で、準備はすべて完了。

ちなみに、参拝の手順は、①山門で合掌②手水場③本堂で納め札を納札箱へ④灯明線香お賽銭⑤読経⑥大師堂でも同様⑦納経所で朱印を授かるというもので、小規模な札所では所要時間30分程度。こうして手探りで始めた遍路も、札所を重ねるうちに、読経もすらすらと、さまになってきた。

○2日目 12番〜23番

翌週、険しい山道を経て12番に。途中、何度も離合があったが、競って譲り合うといった感じで全く問題なし。朝霧の中、心が洗われるよう。13番からは平野部が多い。山頂に位置する20番鶴林寺も、マイカーだとほぼ横付け可能。21番太龍寺へは、ロープウェイで一気。

昔、息子達を連れてカヌー遊びをした那珂川を眼下に見下ろしながら、あつという間に到着。遠く淡路島まで展望できる。2日目の最後は、厄除けで有名な23番薬王寺。ウミガメで有名な大浜海岸を散策した後、美しい海岸線と雄大な太平洋の景観を楽しみながら、南阿

波サンライン経由で宿泊先の穴喰へ。

○3日目 土佐の国「修行の道場」24番〜31番

ここからは、札所間の距離が大きく広がる。眺めが抜群の海岸線をドライブ。室戸岬周辺数寺を経て27番神峰寺へ。急傾斜+車長5m以上は通行止めという難コースを何とかクリアした後は、一気に高知市内に。夕刻まで可能な限り参拝した後、高知名物の鰹のタタキで夕食をすませ自宅へ。

○4日目 32番〜38番

GWを利用して高知市内から再開。桂浜観光や横浪黒潮ラインのドライブなども交え足摺岬へ。途中の入野松原、四万十川、大岐海岸もなかなかのもの。足摺岬周辺を散策し、絶景を堪能した後、38番金剛福寺を参拝。さらに海岸線走りベルリーフ大月で宿泊。

○5日目 伊予の国「菩提の道場」39番〜43番

このあたりから、急速にスローダウン。朝もゆっくり出発。大堂海岸や柏島観光の後、南予の数寺を参拝。ここで挫折し、道後温泉へ。温泉で体を休めた後、自宅へ。

○6日目、7日目 44番〜53番

GWと6月の2回の日帰りで、ようやく松山近辺の参拝を終える。友人宅を訪ねたりではかどらず。

○8日目 54番〜65番

秋に入ってようやく再開。早朝今治に移動し一気に伊予の国の参拝を終える。道すがら、20年以上前(昭和59年6月)、松田先生をご案内して61〜64番を参拝したことを懐かしく思い返す。

○9日目〜13日目 讃岐の国「涅槃の道場」66番〜88番

地元香川ということで、土曜午前のみの参拝に切り替え。いずれの札所も紅葉の名所。紅葉を楽しみつつゆつたりと。こうしてようやく一年近くかけた四国遍路を終えることができた。

○満願のお礼参りとその後

明石海峡大橋経由で、高野山に。霊場・高野ならではの雰囲気を感じ、無事満願のお礼参りを終え、これで打ち止めと考えていたら、妻曰く「お遍路は何回でも」。そんなこんなで、今また二巡目を楽しんでいる。

○皆さんも是非四国へ

以上、ご紹介したように、「四国遍路」は、誰でも容易に経験できる素晴らしい旅。四国ならではの名所や名物も沢山あります。皆さんも是非。



バンコク雑感

井戸垣 孝治

(昭53年卒・中部支部)



オリエンタルホテルにて

立できる“と説得し、前例を創ってしまいました。

自動車部品会社に入社以来、研究開発22年と事業部4年、電子・電気から機械、微細加工プロセス、有機化学まで幅広い分野に関わり、大学時代は劣等性の私が工学博士号も頂きました。“良い技術が良い製品を創る”という考え方をベースに、前例を創り、レーン敷き続けてきたのが私の会社人生です。49歳の折、車両メーカーの車両企画部門と正対する営業の部署に異動し、全社を車両軸でまとめる活動を開始してからも上記の考え方は同じです。但し、お客様は“欲しくて買えるモノを買う”、“そのモノを実現するの”が技術“という考えを上位に持つようになりしました。バンコク赴任を即断で受諾したのは、アジアの人々が何を欲しがっているのかを把握して商品を企画すると同時に必要な技術の構築を構築する業務に、経験と知識とネットワークを活かして取り組み、新たなルールを敷きたいと思ったからです。

バンコクの暮らしについて少し触れてみましょう。タイには春夏秋冬という概念はありません。“暑い”、“ちょっと暑い”、“とても暑い”の3つの季節があると言われます。実際には、最も過ごし易い11月から3月の乾季、ゴル

フ中に倒れるのではないかと思う程暑い4月から5月の雨季、そして夕方に雷と共に雨がドバーと降る6月から10月の雨季です。半袖シャツに半ズボン、そしてサンダルというのが定番です。ホテルやBTS（高架鉄道）の中はギンギンに冷房が効いていますので、長袖をまわっている人も多いいですね。女性は美白を好む方が多くて太陽の光を避けます。手鏡でお化粧を直している人も良く見かけます。ゴルフ場のキャディさんも、事あるごとに樹の陰でお化粧しています。

バンコクでは、人も犬もゴキブリも蚊もゆつくりと動きます。暑いからでしょう。因みに、セブンイレブンの入り口に犬が寝そべっている光景も良く見ます。当初は餌でも貰えるからかと思っていたのですが、実は涼んでいるのだと気がつきました。自動ドアが開閉するたびにエアコンの涼しい風が漏れてくるのです。タイで飢死したという話は聞いたことがありません。果物は豊富だし、イサーンと呼ばれる東北部の人は草（雑草）にしか見えません）や花も食べます。

タイの生活はピンキリです。クイティオというタイのラーメンは80円から100円位です。セブンイレブンでペットボトルの水が15

円、ビール大瓶150円です。屋台や食堂で食べる分には激安で腹いっぱい食べることが出来ます。台所の無い家庭が多く、屋台を使えば外食する方が安いからです。ラーメン屋から料亭まで和食レストランが数多くあり、しかも日本と同等以下の価格で食べることが出来る都市を、私はバンコク以外に知りません。一方、ベントツやBMWを良く見かけます。イッセイ・ミヤケのバッグは王室の方が持っている事からブランド力があります。チープからラグジュアリーまで幅広く存在するのがタイ、そしてアジアです。勿論、イミテーションも沢山ありますのでご注意ください。

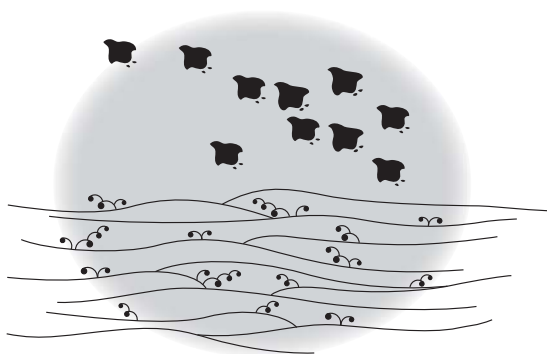
タイを始めとした東南アジアは、自動車にとって様々な特徴のある地域です。雪が降りません。エアコンが必須ですがヒータは不要です。バイオ燃料が当たり前で、CNG（圧縮天然ガス）車も増えています。都会の渋滞はひどく、交差点での3分待ちは当たり前です。タイの最低賃金が300バーツ（780円）／日に引き上げられるのが大騒ぎになるくらい収入レベルが低いので、物は安くないと大衆には売れません。一方、携帯電話は日本以上に発達しており、初任給を上回るほどの価格の最新スマホを新卒者が買います。家族や友人との“つながり”を

大切にするお国柄故でしょうか。

仕事では、“アジアならではのプロジェクト”なるものを立ち上げ、タイに住んでいるからこそできる事、タイに住んでいるからこそやらなければならない事を考え、実行してきました。“アジアの感覚”というテーマでは、インドネシアやサウジアラビアなど様々な国へ出かけていって、現地・現物で人々の価値観を肌身で確認してきました。例えば、サウジアラビアでは、車は“タフでストロング”が必要です。またタイの若者の価値観は“友達に自慢できる”事です。韓国勢や欧州勢に負けないように“アジアのIT”も立ち上げ、つながる系の商品企画活動を開始しました。他にも複数のテーマがあり、現地スタッフと共に、ぶれずに、自分自身でやって見せることにより、ルールを敷き続けています。

若い頃、米国の学会で初めて技術発表した際に英語力の不足を痛感し、細々ながら英会話の勉強を継続して来ました。一方、日本へ出張してきた米国人が英語で話す事に対して、“ここは日本のだから日本語で話せよ”とも思いました。こういう考えからですから、“タイにきたらタイ語が話せない”“と思いい、3年間タイ語会話の勉強を続けていま

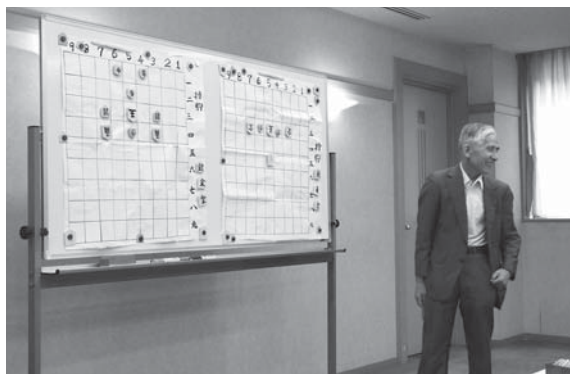
す。悲しいことながら1000習っても99(99・9?)は忘れるという日々が続いています。出来る限りは続けようと思つていますが、いつまでこの地に居るのか判りませんが、自分の会社人生の集大成としてこの地でやれる事をやり切り、"レール"を敷き、前例を創る"事で、少しでもアジアの地域社会に貢献したいと考えています。一緒に歩んでくれる妻に感謝。



同窓会だより

平24年『みとおし会』の開催報告

S30～34各年の同窓会は、連合して拡大同窓会『みとおし会』を年1回開催しております。最近、講師のお話を電気工学に関連した技術開発の歴史や展望を主としたものから、文化活動や趣味領域の話題に広げる試みも始めました。今年度は新機軸を打出しまして、当会発足時S32幹事で、二昔前に「自動車電話」を講演された伊藤貞男氏に「詰将棋開発の面白さと苦労」と題する話を依頼しました。



氏は大張切でA3用紙4枚の予稿集、磁石で付着する厚紙製の将棋駒、将棋盤の紙を貼付けた薄板を用意して、将棋、詰将棋の定義と歴史から、煙詰と言われた超長手順詰将棋の存在、逃げる玉を誘導する駒の配置、氏の創作になる駒配置対称詰将棋などを述べ、質問には実地に駒を動かして説明されました。

出席者は各自それなりに楽しんでおり、少年時アセチレン灯の陰でウサン臭い夜店の詰将棋に興じていた大人達を恐れ覗いていた私の詰将棋観も、一変した会でした。



H24・6・28実施、参加者25名。
S32幹事(文・小山、写真・渡邊)

支部だより

九州支部総会報告

平成24年6月8日(金)、福岡市天神の福岡国際ホールにて、平成24年度九州支部総会を開催しました。本部から幹事の高橋先生をお迎えし、九州支部からは主に福岡在住の会員19名が出席しました。

6月8日(金)当日はまず総会に先立ち、当支部恒例のカクテルパーティーを今年も催しました。このパーティーは、総会開始30分

程前から三々五々集まった出席者が、グラスを片手に歓談するといふものです。パーティー開始時には出席予定者全員が集まり、互いの近況報告などを話し、総会開始前から早くも盛り上がりつつありました。

総会は深堀支部長の挨拶で始まり、昨年度は予定通りに昼食会、懇親会を行い盛況だったことなどについて述べられました。

引き続き、本部幹事の高橋先生からご挨拶をいただき、洛友会本部の動向についてお話を伺いました。

更に、高橋先生からは、ご用意頂いた資料を用いて、京都大学や洛友会の現況などについてご紹介

を頂きました。出席者からも盛んに質問が出て、大いに盛り上がりました。

また、高橋先生からの京都大学の現況紹介に関連し出席者から発言された中で特に多かったのが、近年の学生の学力低下傾向を憂い、日本をリードする京都大学の卒業生である洛友会会員が頑張らなければならない、という声でした。

その後、能見幹事、池田会計幹事から平成23年度活動実績・会計の報告及び平成24年度活動計画の説明を行い、満場一致で承認されました。

懇親会は、増岡先輩(昭和21年卒)の乾杯の音頭で始まり、参加者全員お酒を酌み交わしながら、終始和やかな雰囲気、昔話や近況報告などに花を咲かせました。

楽しいひとときもあっという間に過ぎ、深堀支部長の音頭により懇親会を締めくくり、最後に全員で記念撮影をしてお開きとなりました。

(平7年卒 池田茂雄) 記



関西支部家族見学会報告



平成24年10月13日(土)に関西支部において第36回を迎えた恒例の家族見学会を開催しました。

当日は天候にも恵まれ、風もなく、朝方は多少冷えましたが、日が昇るにつれ気温も上がり、行楽日和となりました。合計60名の方にご参加いただき、天理市のシャープ(株)殿の歴史・技術ホール、葛城山上の葛城高原ロッジ、千代酒造(株)殿の酒蔵を巡りました。

大阪難波駅に集合後、バス二台

に乗り込み、最初に天理市にありますシャープ(株)殿の歴史・文化ホールへと向かいました。百年を迎えた同社創業以来の歴史から日本の電化製品の歩みを垣間見ることができ、みなさん強く興味を持たれたようで、案内の方に熱心に質問される姿も見られました。

その後、葛城ロープウェイに乗車して葛城山を上り、葛城高原ロッジに向かいました。山頂の葛城ロッジでは、到着後に地酒を使った利き酒に挑戦しました。五種類の銘柄を当てるクイズ形式とし、男女問わずみなさん楽しんでいただき、正解者には記念品が贈呈されました。昼食は名物の鴨鍋で、鍋をつつきながら話も弾んだようで、活気ある雰囲気でした。いひとときを過ごすことができました。帰り際には山頂を訪れ、若干霧がかつていたものの、見頃を迎えた「すすき」と奈良から大阪にかけて一望できる眼下の景色に大いに喜んでいただきました。

最後に千代酒造殿を訪ね、酒蔵を見学しました。日本酒の製造方法についての知識はあっても実際の酒蔵見学は初めてという方がほとんどで、みなさん興味深く見学されていました。収穫前の山田錦の田んぼも見学させていただきました。満足された様子で帰途につきました。

熱心にご見学いただいた影響で到着が予定より1時間以上も遅くなる行程となりましたが、様々な場所を巡り充実した1日を過ごすことができました。

(平19年卒 光野英織) 記



第98回関西支部

ゴルフ競技会報告

△プレー状況▽

第98回関西支部ゴルフ競技会が平成24年10月20日(土)武庫ノ台ゴルフコースにて開催されました。

当日は天候に恵まれ、アウトは福川氏(昭和34年卒)、インは伊藤氏(昭和34年卒)の始球式でプレー

を開始し、合計17名(うちシニア10名)が競技に汗を流されました。結果は以下のとおりです。

(シニアの部)

- 優勝 伊藤 俊一 (S34年卒)
- 2位 細田 純一郎 (S36年卒)
- 3位 大澤 靖治 (S44年卒)

(一般の部)

- 優勝 西 亨 (S49年卒)
- 2位 福田 隆 (S57年卒)
- 3位 美濃 由明 (S56年卒)

△懇親会▽

プレー終了後、福田氏(S57年卒)の司会により、表彰式兼懇親会が開催されました。

表彰式では、入賞者に景品および優勝カップが手渡されたあと、入賞報告を頂くとともに、関西洛友会ならびにゴルフ競技会の更なる発展を期待するコメントを頂きました。

△お知らせ▽

洛友会関西支部では同窓生の懇親を深める機会として毎年2回(春・秋)にゴルフ競技会を開催しております。次回は平成25年5月18日(土)を予定しております。若い方も含めて、多数の皆様のご参加をお待ちしております。

△連絡先▽

関西電力株式会社

福田 隆 (S57年卒)

大和田 淳 (H18年卒)

連絡先

050-7104-0871 (大和田)

owadaatsush@b2.kepco.co.jp



本部だより

「先輩と学生との交流会」開催報告

洛友会と電気系教室の共催で、「先輩と学生との交流会」が平成24年12月8日(土)に桂キャンパス・船井哲良記念講堂で開催されました。本交流会は、企業に就職した先輩の話や企業の事業内容を聴いて、心に叶う、目指す方向性を学生に見出してもらうことを目的としています。一昨年度に始まり、今回は第3回の交流会となりました。電気系教室の大学院修士課程1回生および学部3回生の学生を主に対象としていましたが、博士課程の学生も含めて、116名の学生が参加しました。(内訳は、学部3回生…25名、学部4回生…3名、修士1回生…80名、修士2回生…2名、博士1回生…1名、



博士2回生…5名でした。)最近の電気系学生は目的を持たずに入学してくる者が多く、せめて学部3回生の学生が配属される研究室を決める前に、その動機付けとして参考にして頂きたいことも開催趣旨の一環としています。また、修士1回生の学生に対しては、就職活動の面も兼ねております。参加企業は34社で、総合電機メーカー、電力関係、通信関係、電子機器関係、半導体・電子部品関係、機械関係、自動車関係など、幅広い分野の企業が参加しました。参加者のアンケートでは、学生も企業の方も今回ぐらいの規模のほうが説明も意見交換も多くできて良かったという感想を頂きました。



プログラムのについては、午前10時から始まり、洛友会幹事長の荒木光彦先生から開催の挨拶があった後、学科長の小野寺秀俊先生の司会の元で、企業の先輩から3分間のショートプレゼンテーションが行われました。さらに、午後には企業ブースで個別説明と学生との意見交換が行われました。通常の企業セミナーと異なり、①企業側は学生の評価を行わない、②先輩として親身なアドバイスを学生に与えるといった点が特長です。その後、午後4時から、洛友会事務局長の高橋達郎先生の司会の元で、パネル形式で「就職・採用について」の討論会が行われました。まず、三菱電機の平位隆史氏が、自らの企業人としての経験と、企業の採用担当者から見た就職活動のあり方について講演を行ない、また電気工学専攻長の松尾哲司先生が、電気系教室の就職状況の現状と進路について発表を行いました。その後、KDDIの松田浩路氏と修士2回生の真木尚也君がパネリストとなって、体験談を含めて就職・採用について話題提供を行い、会場の学生とのパネルディスカッションを行いました。討論会の後、会場を国際連携ホールに



移して、小野寺先生の司会の元で、先輩と学生を交えた懇親会が行われました。始めに、工学研究科長の北野正雄先生の挨拶が行われ、洛友会前幹事長の木村磐根先生の乾杯の発声の後、和やかな雰囲気の中で先輩と学生との歓談が行われ、午後7時に閉会となりました。



訃報

昭19	山根 清	24・7・27
昭20	伊藤 定昌	24・9・3
昭22	高木 俊宜	24・11・7
昭23	上米良宮夫	23・10・1
昭25	野村 努	23・8・9
昭51	池田 義雄	24・12・15

以上の方々をご逝去なさいました。謹んで哀悼の意を表します。

編集後記

12月に入ると、キャンパスでは立派なスーツ姿の社会人を多く見かけるようになります。採用活動

の解禁を待つて、就職担当教員への訪問が始まります。1月からは、年配の社会人から若い社会人へのバトンタッチが始まります。リクルータは学生と年齢差は僅かですが、服装以外にも表情や身のこなしなど、どこことなく学生とは異なる雰囲気があります。歩く速度は速く、姿勢も良く、表情も活き活きとしています。一方の学生は、ゆっくりと歩くか自転車で駆け回るかのどちらかです。どちらかと言えば憂いを含んだ表情で、活力が漲るような顔は稀です。この違いがどこからもたらされるか編集子なりに分析してみました。一番目の点は時間の自由度だと思います。一日の業務が明確でスケジュールがはっきりしている社会人にとっては、歩くことは次の目的地に到着するための手段でしかありません。多くの学生にとっては、自由な時間が多く、友人と語らいながら、あるいは一人物思いにふけりながら歩くこと自体が目的です。2番目の点は、自信と不安です。社会の中で一定の役割と位置を獲得した社会人に比べ、学生には自由と裏腹の不安感がつきまといまふ。悩ましそうな顔をしてみたり、今までの学生とすれ違うたびに、「今のうちだから、せいぜい悩むことを楽しみなさい」と心の中でエールを送っています。